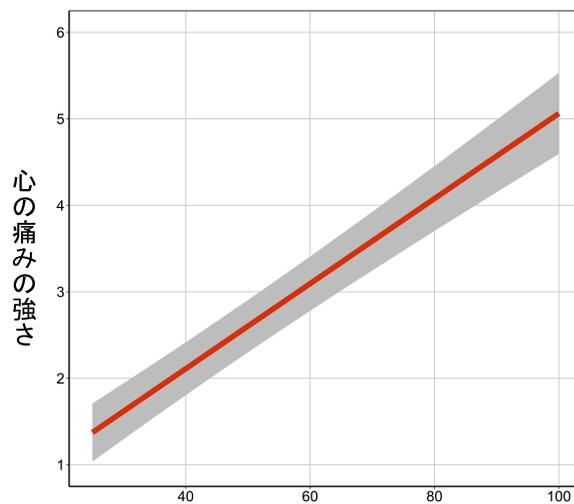


SさんとLさんとの間の  
集団にもたらす利益の量の差 ( $\Delta\pi_{\text{Group}}$ )



排斥した人物が集団にもたらす利益の量

## 「みんなのため」の追放なら心は痛みにくい

国立大学法人東海国立大学機構 名古屋大学大学院教育発達科学研究科の五十嵐祐 准教授は、高知工科大学情報学群の玉井颯一助教とともに、職場での社員の解雇など、集団から特定の人物を排斥する時の基準と、排斥するという決定を下したときの心の痛みを実験的に検討し、集団にわずかな利益しかもたらさない人物を排斥する時には心が痛みにくいことを明らかにしました。

新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、世界各地で大規模な人員削減が行われています。社員の解雇や政治家の更迭といった「排斥」を実行するとき、排斥された人だけではなく、排斥する人も心を痛めているとされています。人が心を痛めながらも他者を排斥できるのはなぜなのでしょう。

本研究では、他者を排斥することに心を痛めるはずの人間が、なぜ排斥を行ってしまうのかを検討し、集団にもたらす利益量の多寡が、排斥を実行するかどうかの一つの基準であり、集団のために排斥する場合、心の痛みが抑制されている可能性を示しました。

こうした研究が進展することにより、解雇や更迭といった多くの社会で採用されている「集団からメンバーを追放する決まり」がどのような心の仕組みで成立しているのかを明らかにすることができると考えられます。

本研究成果は、2021年5月2日付学術雑誌『European Journal of Social Psychology』に掲載されました。

本研究は、科学研究費補助金(16J07018)の支援のもとで行われたものです。

## 【ポイント】

- ・ 職場での社員の解雇など、集団から特定の人物を排斥する時の基準と、排斥するという決定を下したときの心の痛みを実験的に検討した。
- ・ ある人物が、自分(実験参加者)にどのくらいの利益をもたらすのか、そして、集団全体にどのくらいの利益をもたらすのかが、その人物を排斥するかどうかを決めるための手がかりとなる。
- ・ 集団にもたらす利益が少ない人物を排斥した時ほど、心は痛みにくい。
- ・ 人は、「集団のため」になるならば、特定の人物が排斥されても仕方がないと考え、心の痛みを抑え込んでいる可能性がある。

## 【研究背景と内容】

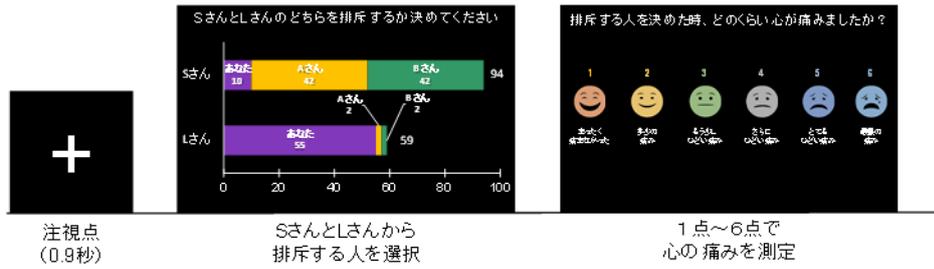
人々の暮らす社会では、社員の解雇のように、集団から特定の人物を追放することが日常に見られます。社会心理学では、こうした追放のことを排斥 (ostracism) とよび、排斥された人が強い心の痛みを感じることを明らかにしてきました。近年では、人は「人々はお互いを受け入れ合うべき」と考えるため、排斥した人もまた心を痛めるとされています。われわれの研究では、他者を排斥することに心を痛めるはずの人間が、なぜ排斥を行ってしまうのかを検討しました。

本研究では、実験参加者と A さん、B さん、S さん、L さん(A さん～L さんは架空の人物)の5名の集団で、お互いに協力し合いながら利益をあげている状況を想定しました。このとき、資源が少なくなってきたため、集団を存続させるためには1名を排斥しなければならない状況であることを実験参加者に伝えました。こうした説明を受けた後、実験参加者は図 1-A の流れにしたがって実験に取り組みました。

まず、実験参加者にはグラフが提示されました。このグラフには、2名の人物が他のメンバーにもたらす利益の量が描かれていましたが、その描かれ方に特徴がありました。1名は、集団に多くの利益をもたらすが参加者にはわずかな利益しかもたらさない人物(図 1-B 上段・S さん)として、もう1名は、集団にはわずかな利益しかもたらさないが参加者には多くの利益をもたらす人物(図 1-B 下段・L さん)として描かれていました。実験参加者はこのグラフをよく見て、SさんとLさんのどちらを排斥するかを決めました。その後、排斥する人物を決めたときの心の痛みについて、1点「まったく痛まなかった」から6点「最悪の痛み」で回答しました。

この実験では、以上の一連の手続きを1回として、グラフの数字を細かく変更しながら合計40回繰り返し実施しました。

(A) 実験課題の流れ



(B) 実験で使ったグラフの例

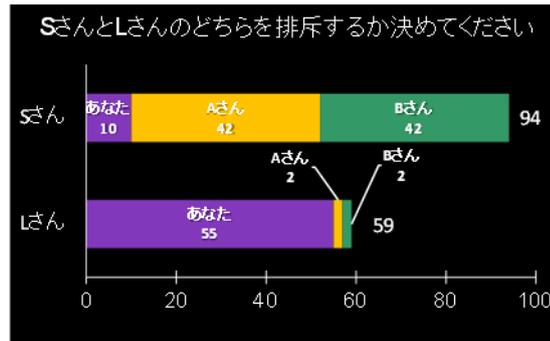


図1 実験の概略(A)とグラフの例(B)

実験の結果、以下の2つのことが明らかになりました。第一に、排斥の候補である人物(SさんとLさん)の集団への貢献度に大きな差がある時ほど、集団への貢献度が少ない人物(図1-BではLさん)が排斥される確率が高くなることが明らかとなりました。この時、集団への貢献度が少ない人物は、排斥する人にとっては得になる人物として設定されていました。すなわち、この結果は、集団の利益になるのであれば、人は自らの利益となる人物さえも排斥してしまうことを示しています。

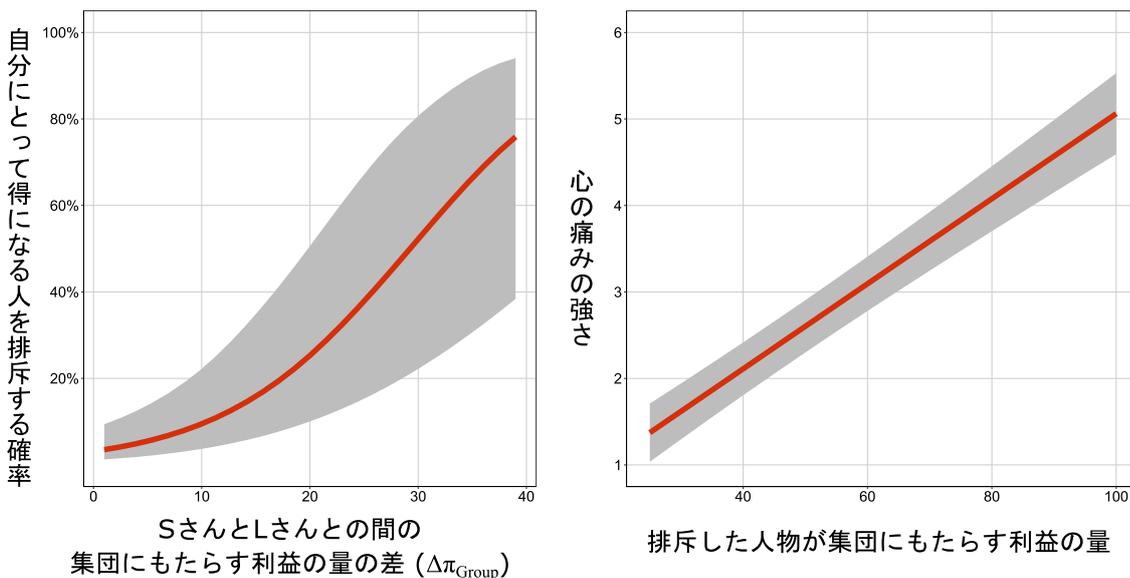


図2 参加者の利益になる人物を排斥する確率(左)と排斥した時の心の痛みの変化(右)

第二に、排斥する人物が集団にもたらす利益が多い人物であった時ほど、排斥した後の心の痛みが強くなることが明らかになりました。逆に言えば、集団にもたらす利益の量が少ない人物を排斥しても、心は痛みにくいことが示されたと解釈できます。これらの結果は、異なる人々を対象に行なった4つの実験を通じて一貫して再現されました。

今回の成果により、集団にもたらす利益量の多寡が、排斥を実行するかどうかの一つの基準であり、集団のために排斥する場合、心の痛みが抑制されている可能性が示されました。

### 【成果の意義】

今回の実験では、集団にもたらす利益の量が少ない人物を排斥した時ほど心が痛みにくいことが確認されました。しかし、今回の実験では、心の痛みを自己報告してもらったに過ぎません。そのため、集団にもたらす利益の量が少ない人物を排斥した時、そもそも心の痛みが生じていないのか、それとも、一度は心を痛めながらも、そうした痛みを抑え込んだのかは明らかではありません。こうした細かな心の働きを明らかにするためには、神経科学の手法などと組み合わせて検討を続けることが有効だと考えられます。こうした研究が進展することにより、解雇や更迭といった多くの社会で採用されている「集団からメンバーを追放する決まり」がどのような心の仕組みで成立しているのかを明らかにすることができると考えられます。

### 【論文情報】

雑誌名 : European Journal of Social Psychology

論文タイトル : Odd man out for everyone: The justification of ostracism to maximize the whole group's benefits

著者 : 玉井 颯一 (高知工科大学情報学群 助教)

五十嵐 祐 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科 准教授)

DOI: 10.1002/ejsp.2725

URL: <https://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1002/ejsp.2725>

<https://onlinelibrary.wiley.com/doi/epdf/10.1002/ejsp.2725>